

東京教育大学

体育学部の歩み

— 戦後体育の模索と探求 —

監修

金子明友

松本千代榮

成田十次郎

森昭三

関岡康雄

朽堀申三



茗溪体育百周年記念誌

目次

茗体会百周年記念誌

東京教育大学体育学部の歩み —戦後体育の模索と探求—

口絵

発刊にあたって	茗体会会長	中島 光廣
祝辞	筑波大学長	永田 恭介
祝辞	茗溪会理事長	江田 昌佑
祝辞	監修者代表	金子 明友

目次

第1章 東京教育大学体育学部の系譜 1

- I 体操伝習所の開設
- II 東京師範学校における体育教育と体操科教員養成
- III 高等師範学校・東京高等師範学校体操専修科における体操科教員養成
- IV 東京高等師範学校体育科の開設と沿革
- V 東京文理科大学の創設と体育研究
- VI 体育研究所の設立と体育研究
- VII 東京高等体育学校（東京体育専門学校）の創設と教育

第2章 東京教育大学体育学部の歩み 11

- I 新制大学への移行と体育学部の課題 12
 - 1 戦後「新体育」の模索
 - 2 新制東京教育大学の設立経緯
 - 3 体育学部の設立経緯
 - 4 体育学部における教育
 - 1) 体育学科 2) 健康学科・健康教育学科 3) 武道学科
 - 5 体育学部の教育・研究組織
 - 1) 体育学 2) 健康学・健康教育学 3) 体育運動学
 - 6 大学教育における体育：一般体育の制度化
 - 7 体育学専攻科の開設と教育
 - 8 大学院体育学専攻科の開設と教育
 - 9 スポーツ研究施設の開設と研究活動
 - 10 体育学部の閉学と筑波大学への移転
- II 東京教育大学体育学部における講座の教育と研究 52
 - 1 体育学科 52
 - 体育学（体育原論）／体育史／体育心理学／体育管理学／体育社会学／体操学
 - 陸上競技学／球技学／野外運動学／舞蹈学
 - 2 健康学科・健康教育学科 62
 - 応用解剖学／運動生理学／運動衛生学／健康管理学／運動医学／栄養学
 - 3 武道学科 67
 - 武道論／柔道／剣道／弓道
 - 4 東京教育大学体育学部の研究・教授内容（昭和38年度）・講座名称の変遷 72
- III 東京教育大学体育学部の恩師 78
 - 1 歴代学部長の略歴 78
 - 初代 大谷武一／第2代 野口源三郎／第3代 今村嘉雄／第4代 本間茂雄
 - 第5代 鶴岡英吉／第6代 前川峰雄／第7代 浅川正一／第8代 梅田利兵衛
 - 第9代 松田岩男／第10代 菅原 禮

2	歴代附属スポーツ研究施設長の略歴	82
	初代 名取禮二/第2代 本間茂雄/第3代 杉 靖三郎/第4代 前川峯雄 第5代 竹之下休蔵/第6代 渋谷侃二/第7代 金原 勇/第8代 多和健雄	
3	恩師の思い出	84
	大谷武一/野口源三郎/前川峯雄/丹下保夫/浅田隆夫/今村嘉雄/岸野雄三/肥後和男 松井三雄/鈴木 清/小林晃夫/松田岩男/江尻 容/宇土正彦/大石三四郎/竹之下休蔵 菅原 禮/本間茂雄/金子明友/松延 博/板垣了平/鶴岡英吉/浅川正一/武政喜代次 古藤高良/笠井恵雄/多和健雄/梅田利兵衛/長谷川純三/松本千代榮/森田 茂 木村邦彦/杉本良一/小川新吉/杉 靖三郎/田中英彦/北浜 章/小林和夫/阿部三亥 大塚正八郎/豊田 章/平井 淳/大滝忠夫/渡辺一郎/松本芳三/中野八十二/金原 勇	
第3章 体育学部の学生生活		131
I	学生生活の思い出	132
	齊藤定雄/福本久雄/野口昌三/佐藤良男/池田稔明/西谷明子/野本忠雄/矢島秀次 勝田 茂/川田節子/船山恵子/六笠元子/岡尾恵市/浅井慶一/吉崎仁啓/森川貞夫 坂田信久/松永淳一/土谷忠昭/山西哲郎/田口正公/高橋和之/作道正夫/本間二三雄 朝岡正雄/本城一隆/福本敏雄/広川俊男/小俣幸嗣/高橋和子/野瀬清喜/今田恵美	
II	座談会	163
	あの頃のこと (1) (2)	
第4章 体育系クラブ活動		185
I	東京教育大学時代の運動部活動について	186
II	東京教育大学の運動部活動	188
	軟式庭球部/硬式庭球部/弓道部/柔道部/剣道部/蹴球部/漕艇部/硬式野球部 陸上競技部/水泳部/ラグビー部/体操部/バスケットボール部/バレーボール部 ハンドボール部/ダンス部/リズム体操部/空手部/ゴルフ部/スキー部/卓球部	
III	世界に羽ばたいた茗溪体育・スポーツ	212
	帖佐寛章/小野 喬/ヨネヤマ・ママコ/小野清子/遠藤幸雄/猪熊 功/加藤澤男	
IV	年度別活動成績	220
	運動部活動年表・オリンピック出場選手一覧	
第5章 各界におけるOB・OGの活躍		225
I	各界における学部卒業生の活躍	226
	文部省/JOC/日本体育協会/日本学術会議/日本体育学会/日本学校保健学会 女子体育連盟/中体連/高体連/政界1/政界2/財界/財界/教育行政/学校教育 全国校長会/茗溪会/日本学校体育研究連合会/官庁/大学各スポーツ団体/ラグビー協会	
II	戦後学校体育・学校保健の研究組織と体育学部	247
	全体研/学校体育研究同志会/保健教材研究会/学習指導要領・指導書・解説書 運動学研究会/モダントレーニング研究会	
座談会 これからの茗溪体育はどこへ向かうのか		261
資料編		281
I	体育学部の研究室と教員組織 (昭和24年~52年)	
II	東京教育大学学則 (昭和24年度) 抄	
III	東京教育大学体育学部紀要/東京教育大学体育学部スポーツ研究所報	
IV	歌集	
V	茗体会会則/茗体会について/茗体会役員	
VI	卒業生名簿/就職状況一覧	
VII	東京教育大学体育学部関係年表	

教育大最後の…

今田恵美(旧姓・松本) 昭和52年(1977) 体育学科卒

稽古量が増した。しかし、全日本学生では勝利の女神が微笑まなかった。準々決勝の明治大学戦で7名全員が引き分け、代表戦2回の末に敗退となった。

それからの日々の辛さと無力感は忘れることができない。しかし、それ以上に鮮明に残っているのは、稽古後、真っ暗になった幡ヶ谷のグラウンドを全員で20周したこと、試合の日の朝6時に幡ヶ谷商店街の人たちが炊き出しを持って見送ってくれたこと、などである。

素晴らしい恩師と仲間たちに囲まれて、幸福な4年間を過ごすことができた。全日本学生優勝の夢は筑波大の後輩たちに託すことになったが、何物にもかえがたい体験と思い出を手に入れた。翌年、同級生たちは教員となって全国各地に巣立っていった。自分だけは大学に残り大学院を目指したが、その年、教育大の大学院は筑波移転に伴い募集停止となった。

筑波大学に新しい大学院が設置され、幸運にも1期生となることができた。当時の筑波は舗装道路も少なく、商店街や飲み屋もなく、ないない尽くしの生活であった。しかし、自分は数少ない教育大と筑波大のハーフであることを誇りに思っている。

大塚、幡ヶ谷、桐花寮に4年、草創期の筑波に6年間籍を置けたことも、今は懐かしい思い出である。新潟に帰り教員になる夢は叶わなかったが、現在の職場を得て30年余りが過ぎた。小学校、中学校、高校にそれぞれに40名を超える教員を送り出し、大学教員、博士号取得者も10名近く育った。嘉納師範の「一世の化育遠く百世に及ぶ」ことを祈る毎日である。

同級生たちも各地で校長や大学副学長などを歴任し、立派に職責を終えようとしている。自分も初心に帰って最後の人材育成に全力を注ぎたい。それこそが母校東京教育大学と、お世話になった先生方に対する恩返しである。



1975年5月 東京学生優勝 前列右から2番目筆者

教育大最後の入試初日は雪模様だった。教育大最後の入学式に、教育大最後の新生は、嬉しいような、けれど、心のどこかに寂しさを抱えて臨んだ。そして、以後、私達には常に、「教育大最後の」という枕詞がつくようになる。よし、面白いじゃないか。見届けてやろう、というのが入学志望の動機の一部だったかもしれない。

1年目は4学年そろっているし、一般教養の科目を受講するために通った大塚の正門前の立看板に「移転反対!」の角ばった文字が躍っているのさえ除けば、ごく平穏な毎日だった。教育大最後の…を思い知らされたのは2年目の春だ。確かに2年生になった。が、居るはずの下級生が居ないのだ。部活動に所属していた学生は、下級生のいない練習、週末に筑波へ行ったり下級生が幡ヶ谷まで来たりと、不便や時間の浪費を余儀なくされた。校内の施設も目に見えない部分から筑波への引越しが徐々に始まっていた。

第14回学部祭(昭和49年)自治会委員長(綿引勝美)の挨拶文にも、「昨年の筑波法案通過以来我々の勉学条件は予想以上に危機に瀕しており、予算が大幅に削減され、各研究室の予算もほぼ半減、各種手続きなどが簡略化され、学生へのケアが手薄になっている」由書かれている。学部祭もこの年を最後にその後開催された記憶がない。新しく導入されるものは何もない、だんだん学生の数が減っていく、残されたものを大事に使っていく、そんな学生生活だった。

そして4年次、卒論という大きな試練を乗り越えなくてはならない私たちの前に立ち上がったのは、「図書館の移転」という、本来ならば閉学部まで待たなければならないであろう作業が、着々と進んでいたという事実だった。古い書棚はがらんとして虚しく、参考文献は引越しが進行していた。研究室の中の文献でさえ然りだ。たぶん移転に値しなかったであろう、「最新スキーの技術」などという古ぼけた写真入りの本をばらばらとめくり、いったい何を研究テーマにしたものか…と途方に暮れた。

「早めに入学願書を出さないと、寒い寒い体育館での受験になるから、早く出しなさい。S館と体育館は、天国と地獄だ。」と教えてもらって勝ち取った「S館」。どれほどの天国なんだろうと期待しつつ初めて教室に入った時の驚きは忘れられない。木造の、隙間風ありの、小学校卒業以来お目にかかったことのないような古い木の机と椅子…。天国…??それでも特講の授業などで使用していくうちに愛着がわいた。歴史の刻まれた木のぬくもりが優しかった。そのS館が、ある日、突然取り壊された。在学中に。S館には、女子しか知らない秘密の小部屋があった。「舞踊伴奏法」なるピアノの授業が必修で、その練習のために自由に使ってよいピアノが数台、

2畳ほどの小部屋が並んでいる中に1台ずつ置いてあったのだ。その小部屋たちも、古びて調律が今一つだったピアノたちも一緒に、ある日、S館はきれいに無くなって更地になっていた。

片手をもがれ、片足を引っこ抜かれるようにして幡ヶ谷の敷地と機能はスカスカになっていった。移転することは解っていた。教育大がもうすぐなくなってしまうことも納得していた。胸に寂しい思いを抱えながら、数少ない学生たちは、それでも底抜けに明るい学生生活を送ったものだった。

とうとう、昭和52年2月19日に体育学部閉学部記念式典が行われることになった。「校歌」を斉唱するから、というので、にわかコーラス隊が招集された。え?!校歌?宣揚歌ではなくて?と、耳を疑った。有志の女子数人に課せられたのは、聞いたことのない、やけに拍子の取りにくい校歌の練習だった。当日、幡ヶ谷の体育館に多数の来賓をお招きし、閉学部式典は粛々と執り行われた。

青雲の空に高く 桐の葉と照り明るもの
故あり大塚 我等興れり 往くべし正大
明日の儀表 文新新たに時代を指示せん
拳がれよ若人 栄あれこの岡
愛なり道なり使命は一なり

これを三番まで舌をかみそうになりながら歌い上げた後の宣揚歌のなんとも清々しかったことか。宣揚歌は今でもそらんじられるが、校歌の方はメロディーが思い出せない。

3月25日、大塚で教育大最後の卒業式が行われた。当時の読売新聞の夕刊(全国紙)は、こう伝えている。—前略—
会場の大講堂は「九割以上の出席率」(学生課)という超満員で座りきれない学生は入り口で立ったまま。その中で、例年、ほかの大学に比べ少ないと言われる女子学生の振袖姿が、二十八年の歴史を閉じる文字通りの「お別れ卒業式」のせい
か、特に目立って多かった。—後略—

東京教育大学学生部が出していた「桐葉」No.62 終刊号の冒頭の、体育学部長であられた菅原禮教授の寄稿にこうある。

運動場、体育館そして道場から、額に汗した学生達の心身の躍動を楽しむ姿が消えた時、はじめて閉学部の厳しさと寂しさが交錯する複雑な心境になる。それは辺境にあって西の空に沈む夕陽を見つめている時の心境にも似ている。—後略—

思い出の幡ヶ谷の校舎は、夕陽となって沈んでいった。今では、かくかくとクランクのように曲がった旧体育館前の道路だけが当時を偲ばせる。卒業後2回行われた同期会に全国から馳せ参じた仲間の口から出るのは、「楽しかったなー、あの頃」。それぞれの胸にしっかりと目標を持って過ごした幡ヶ谷は、決して廃墟になったのではなく、我々の胸の中に生き続けている。自己紹介で「教育大最後の卒業生の…です。」と言いつ切る時、幾ばくかの誇りと強い連帯感と満足感が伴うのは私だけではあるまい。

監修

金子明友 松本千代榮 成田十次郎 森 昭三 関岡康雄 枋堀申二

編集委員会委員

茗体会会長：中島光廣 (28 健)

記念誌編集委員長：枋堀申二 (33 体) 阿部生雄 (43 体)

副編集委員長：野口昌三 (29 健) 河鍋 齋 (35 健) 高田日呂美 (38 健) 大熊廣明 (47 体)

担当編集委員

会 計：◎金子十美代 (38 体) 小野満禎子 (38 体) 高島智子 (43 体)

第一章：◎小林慧歩 (31 健) ○佐野和男 (30 体) 伊藤忠一 (28 体) 河鍋 齋 (35 健) 大木正則 (41 体)

第二章：◎浪越信夫 (32 体) ○安孫子友行 (31 体) 松田智男 (29 体) 永井 實 (33 健)

川口千代 (34 体) 大熊廣明 (47 体) 野村良和 (47 健) 藤堂良明 (48 武) 東風谷 満 (49 健)

第三章：◎永井 純 (42 体) ○吉田 章 (45 体) 加藤三郎 (29 健) 野口昌三 (29 健) 丹羽 昇 (32 体)

松本光弘 (39 健) 安達宣朗 (40 健) 山中邦夫 (42 体)

第四章：◎高橋伍郎 (35 体) 福本久雄 (28 体) 坂上季男 (30 健) 宮下 憲 (45 体) 椿本昇三 (51 体)

第五章：◎廣瀬照夫 (30 体) ○石橋 泰 (37 健) 水田拓道 (34 健) 岸本弘子 (36 健) 河本 武 (37 健)

資料編：◎川端春生 (36 体) 三條和男 (32 健) 平島 満 (39 体) 北尾雅迪 (44 健) 本城一隆 (45 体)

故 人：築地美孝 (34 体) 春山國廣 (36 健)

茗体会百周年記念誌
東京教育大学体育学部の歩み
—戦後体育の模索と探求—

2015 (平成 27) 年 11 月 15 日 発行

編 集 茗体会百周年記念誌編集委員会

発 行 茗 体 会

〒 174-0071 東京都板橋区常盤台 2-28-8
電話 03-3967-1310

印 刷 壮光舎印刷株式会社

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-20-9
電話 03-3802-6311